

安里神無良川古墓群

— マンション建設に伴う緊急発掘調査報告 —

1995年8月

有限
会社 島産業不動産

那覇市教育委員会

あ さと か ん ら がー こ ぼ ぐん
安里神無良川古墓群

—— マンション建設に伴う緊急発掘調査報告 ——

1995年8月

有限 島 産 業 不 動 産
会 社

那 覇 市 教 育 委 員 会

例 言

1. 本報告書は、1993年に実施した安里神無良川古墓群の緊急発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 本発掘調査は、有限会社島産業不動産によるマンション建設に伴うもので、那覇市教育委員会が依頼をうけて実施した。
3. 発掘調査および本報告書作成においては、有限会社島産業不動産のご協力を頂いた。記して謝意を申しあげる次第である。
4. 本報告書に掲載した国土基本図は、国土地理院の発行したものを複製した。
5. 本報告書に掲載した戦前の字安里民俗地図は1977年4月14日の沖縄タイムス朝刊に掲載されたものを複製した。
6. 発掘調査および出土遺物整理、写真撮影、現像・焼付等は、山城直子、大城一成、栗山初美、宮良文子、比嘉君子、仲里志麻子（那覇市教育委員会文化課臨時職員）の協力を得て行った。
7. 本報告書の執筆は、第4章を古塚達朗（那覇市教育委員会文化課主査）による。その他の執筆・編集は島の協力を得て仲宗根が行った。
8. 今回の発掘調査で得られた資料は、那覇市教育委員会文化課で保管している。

報 告 書 抄 録

ふりがな	あさとかんらがーこぼぐん							
書名	安里神無良川古墓群							
副書名	マンション建設に伴う緊急発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	古塚達朗 仲宗根啓							
編集機関	那覇市教育委員会文化課							
所在地	〒900 沖縄県那覇市樋川2-8-8 ☎098-853-5775							
発行年月日	西暦1995年8月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あさとかんらがー 安里神無良川 こぼぐん 古墓群	なはしあさとかん 那覇市安里神無 らがーぼぐん 良川原168	47201		26度 13分 00秒	127度 41分 30秒	19930830) 19930910	50	有限会社島 産業不動産 によるマン ション建設 に伴う緊急 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
安里神無良川 古墓群	古 墓	近 世	掘り込み墓3基	陶製蔵骨器(厨子甕) 陶器製袋物(底部資料)		県内で調査例の少ない小禄砂岩地帯に立地する古墓3基の発掘調査		

目 次

例言

報告書抄録

本文目次

第1章	はじめに	1
第2章	遺跡の位置と環境	3
第3章	調査の概要	6
	A. 1号墓	6
	B. 2号墓	6
	C. 3号墓	9
第4章	神無良川原の古墓について	11
第5章	まとめ	12

挿図目次

第1図	那覇市の位置	2
第2図	那覇市内の主な古墓群	4
第3図	遺跡周辺の現況図	5
第4図	1号墓実測図	7
第5図	2号墓実測図	8
第6図	1号墓出土遺物	9
第7図	戦前の字安里民俗地図	10

図版目次

図版1	1号墓出土遺物
図版2	遺跡近景 上：北東から 下：東から
図版3	上：遺構配置状況（右から1号墓・2号墓・3号墓） 下：発掘調査作業状況
図版4	1号墓 上：正面の状況 下：下部墓（墓室内床）の状況
図版5	2号墓 上：入口部（正面）の状況 下：（左）入口部（内部）の状況 （右）墓室の状況
図版6	3号墓 上：正面の状況 下：墓室の状況
図版7	安里神無良川（井泉） 上：西から（右奥の斜面部が本遺跡） 下：南から
図版8	出土遺物 1号墓出土（1～4）・3号墓出土（5・6）

第1章 はじめに

那覇市内ではここ数年、公共事業、民間ビル建設、個人住宅建築などの開発行為により、埋蔵文化財の緊急発掘調査が増加している。これは本市を問わず県内各市町村でも同様な傾向が見られる。

さて、1993（平成5）年6月、有限会社島産業不動産より那覇市安里神無良川原168他に於いてマンション建設計画に伴う『埋蔵文化財事前審査願』が、本市教育委員会に提出された。

その地域には周知の文化財である井泉「神無良川（カンラガー）」があり、直ちに現地踏査が行われ、神無良川が位置する小丘陵の崖上には数基の古墓が確認された。

その旨を有限会社島産業不動産に報告し、両者の間で遺跡保存のための協議が行われた。しかし、予定工事の変更は困難であり、古墓3基について止むを得ず記録保存のための緊急発掘調査を行うことが合意された。

調査は、1993（平成5）年8月30日から9月10日までの日程で実施された。

調査経過は次のとおりである。

8月30日 1号墓調査開始。比較的保存状態が良く、蔵骨器（厨子甕）等、遺物の検出が期待された。

31日 2・3号墓調査開始。2号墓は、ビン等のゴミ除去作業に手間取った。

9月1日 3号墓掘り下げ作業終了。後世の破壊が著しく保存状態は極めて悪かった。

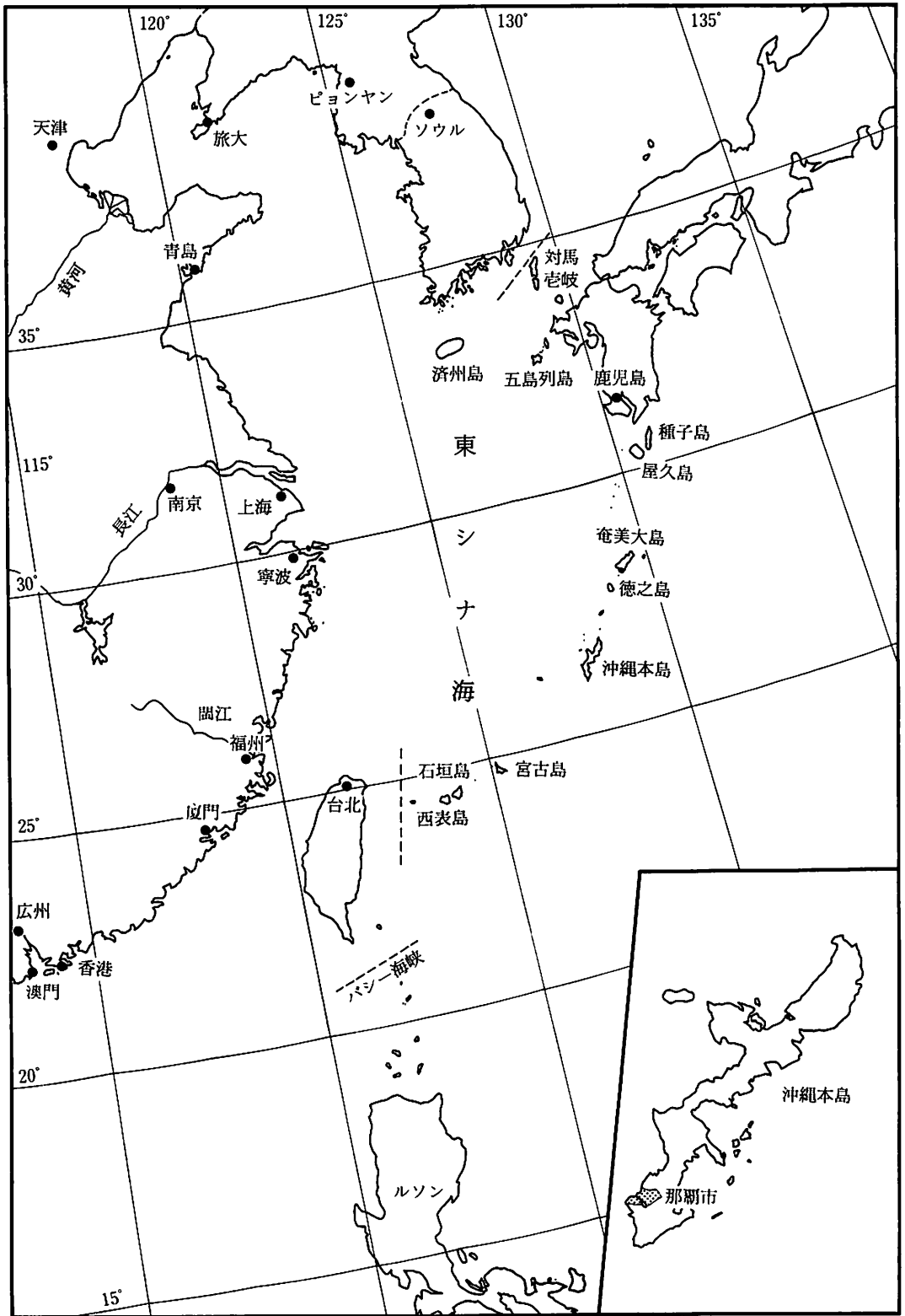
2日 2号墓精査・掘り下げ作業終了。

3日 1号墓精査・掘り下げ作業終了。

6日～10日 B・M設定および各墓の実測調査を行い、すべての現地作業を終了した。

なお、調査体制は次のとおりである。

調査責任者	嘉手納 是 敏（那覇市教育委員会 教育長）
	高江洲 隆（ ” 文化課 課長）
調査総括	金 武 正 紀（ ” ” 主幹）
事業事務	新 城 和 範（ ” ” 文化係 係長）
調査員	島 弘（ ” ” ” 主事）
	内 間 靖（ ” ” ” ” ）
	玉 城 安 明（ ” ” ” ” ）
	仲宗根 啓（ ” ” ” ” ）
調査協力者	渡久地 真（ ” ” ” 調査補助員）
	（現 中城村教育委員会 主事）
調査作業員	有限会社島産業不動産が直接雇用した。



第1図 那覇市の位置

第2章 遺跡の位置と環境

沖縄県は、日本列島の西南端に位置し、四方を海に囲まれた島々で成り立つ海洋県である。気候は亜熱帯気候に属し高温多湿である。(第1図)

那覇市は、沖縄本島西南部に位置し、西側は珊瑚礁が広がる東シナ海に面している。北には浦添市、東に西原町、南風原町、南に豊見城村が隣接する。総面積は38.08km²、人口は303,589人(平成6年3月現在)で県下第一の都市である。また、県庁など主要な官公庁や企業が集中した政治経済の中心地である。(第2図)

市内の地形を概観すると、安里川、安謝川、国場川などの下流および海岸沿いには低地(完新世・沖積層)が広がる。その低平な地形のまわりを北に天久台地、北東に首里台地、東に識名台地(更新世・琉球層群)が取り囲み、その基盤は、泥岩や砂岩(鮮新世、中新世・島尻層群)によって構成される。特に、市南部の小禄付近では島尻層群(豊見城層)の砂岩(小禄砂岩)が顕著に見られる。

本古墓群の位置する安里は、本市のほぼ中心に位置する。その一帯は明治頃まで田畑が広がる静かな農村地帯であった。大正年間に鉄道が敷かれ、安里交差点付近に安里駅が設置されると、人々の往来が増加し、にぎわいを見せるようになる。また戦前(第2次世界大戦)まで湿地帯を通る牧志街道(現県道39号線)が戦後(1953年～1954年)に改修され、その繁栄から「奇跡の1マイル」と称される現在の国際通りに発展する。それに伴い、安里周辺は住宅地や商業地が広がる街並へと発展した。将来的には隣接する天久解放地の整備や都市モノレール関連事業等の開発・整備により周辺の環境が一層変化していくものと思われる。

また、安里には、琉球八社の一つである安里八幡宮をはじめ崇元寺跡、オキナワノ獄、安里橋、井泉「神無良川(カンラガー)」等の文化財が随所に見られる。

本古墓群の立地する丘陵は、旧安里村の後背地に占地し、古くから墓域として利用されていたものと考えられる。現在、遺跡周辺は幹線道路から奥まった場所に位置することもあり、住宅地が広がる静かなたたずまいを呈している。

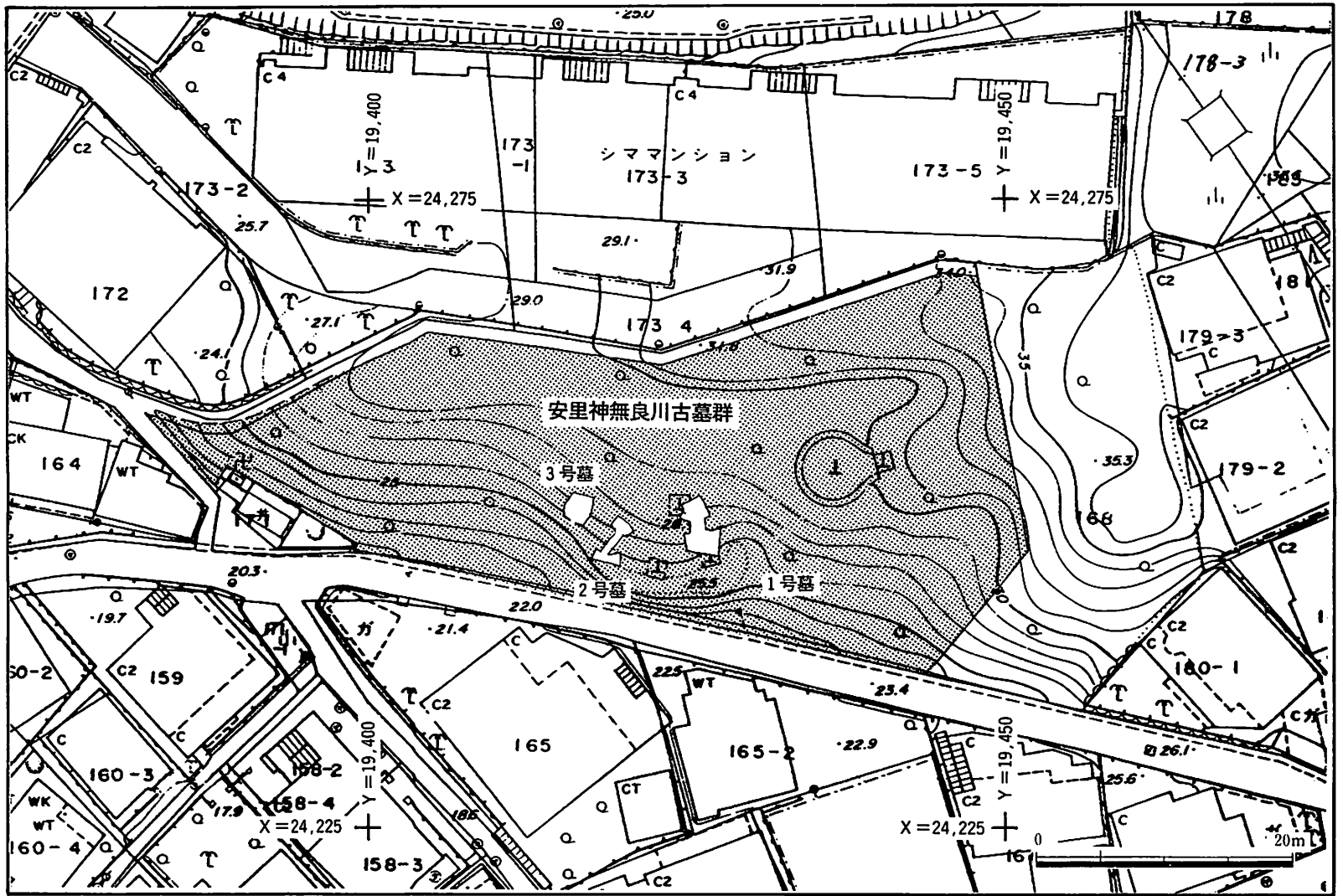
ところで、市内では、本古墓群を含めて多くの古墓群が確認されている。第2図にその分布を示した。

参考文献

- | | |
|--------------------------------------|-------|
| 那覇市企画部広報課 編集『第34回 那覇市統計書 平成6年版』那覇市役所 | 1995年 |
| 木崎甲子郎 編著『琉球弧の地質志』沖縄タイムス社 | 1985年 |
| 沖縄大百科事典刊行事務局 編集『沖縄大百科辞典』沖縄タイムス社 | 1985年 |
| 那覇市教育委員会文化課 編集『那覇市歴史地図』那覇市教育委員会 | 1986年 |



第2図 那覇市内の主な古墓群



第3図 遺跡周辺の現況図

第3章 調査の概要

今回、調査を行った古墓は3基である(第3図)。小祿砂岩(方言でニービ)の小丘陵上に形成された掘り込み墓(方言でフィンチャー)である。1、2号墓の保存状態は良好であった。墓庭については3基とも確認することはできなかった。また、各墓から得られた蔵骨器(厨子甕)などの遺物は、そのほとんどが破片で、量的にもごく僅かであった。

以下、各墓別にその形態や特徴、出土遺物の概要を報告する。

A. 1号墓(第4図・図版4)

本墓は、標高約25.0m前後の丘陵上に位置し、主軸を北に向ける。

墓室の縦軸は約1.7m、横軸は約2.2mを測り、横長の長方形を呈する。その墓室の奥壁に底面から約0.34mの高さを測る壇(方言でタナ)が1段設けられている。さらに左右両側には奥壁の壇より若干低い壇がそれぞれ1段ずつ設けられている。墓室内床(方言でシルヒラシ)は縦軸約0.98m、横軸約1.26mを測り、略台形を呈する。墓室の全面(奥、左右の壇および内床)にサンゴ石が敷き詰められている。

墓口は石灰岩が配されており、その表面には漆喰やモルタルが見られる。

入口部は、奥行約0.9m、幅約0.7m、高さ約0.8mを測る。その床面には2～3段の石敷きが配されている。また、墓室を掘り下げると古い時期の墓室内床(サンゴ敷き)が確認された(図版4)。そのことから本墓において造り替えが行なわれたことが示唆されたが、時期差については判然としなかった。

出土遺物としては、蔵骨器(陶製厨子甕)の他に瑠璃釉陶器の底部資料が得られた。(第6図・図版1)。高台径7.5cm、高台高0.7cm、底部厚1.3cm、現存器高2.7cmを測る。器面全体は白土による化粧が施され、その上に青色の釉薬(瑠璃釉)が施釉されている。胎土には雲母、赤色粒が多量に混入する資料である。

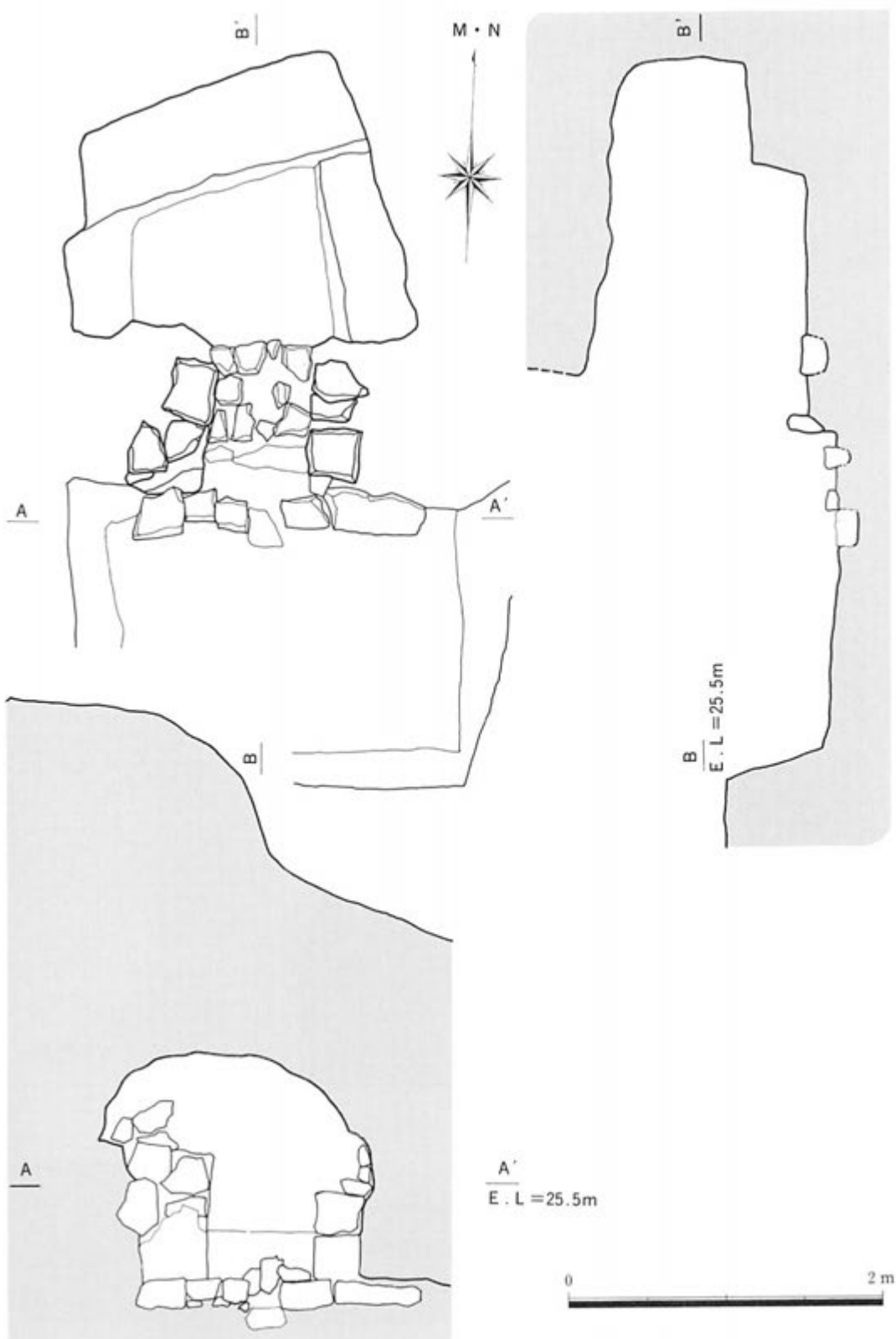
B. 2号墓(第5図・図版5)

1号墓と同様、標高約25.0m前後に位置し、主軸を北東に向ける。

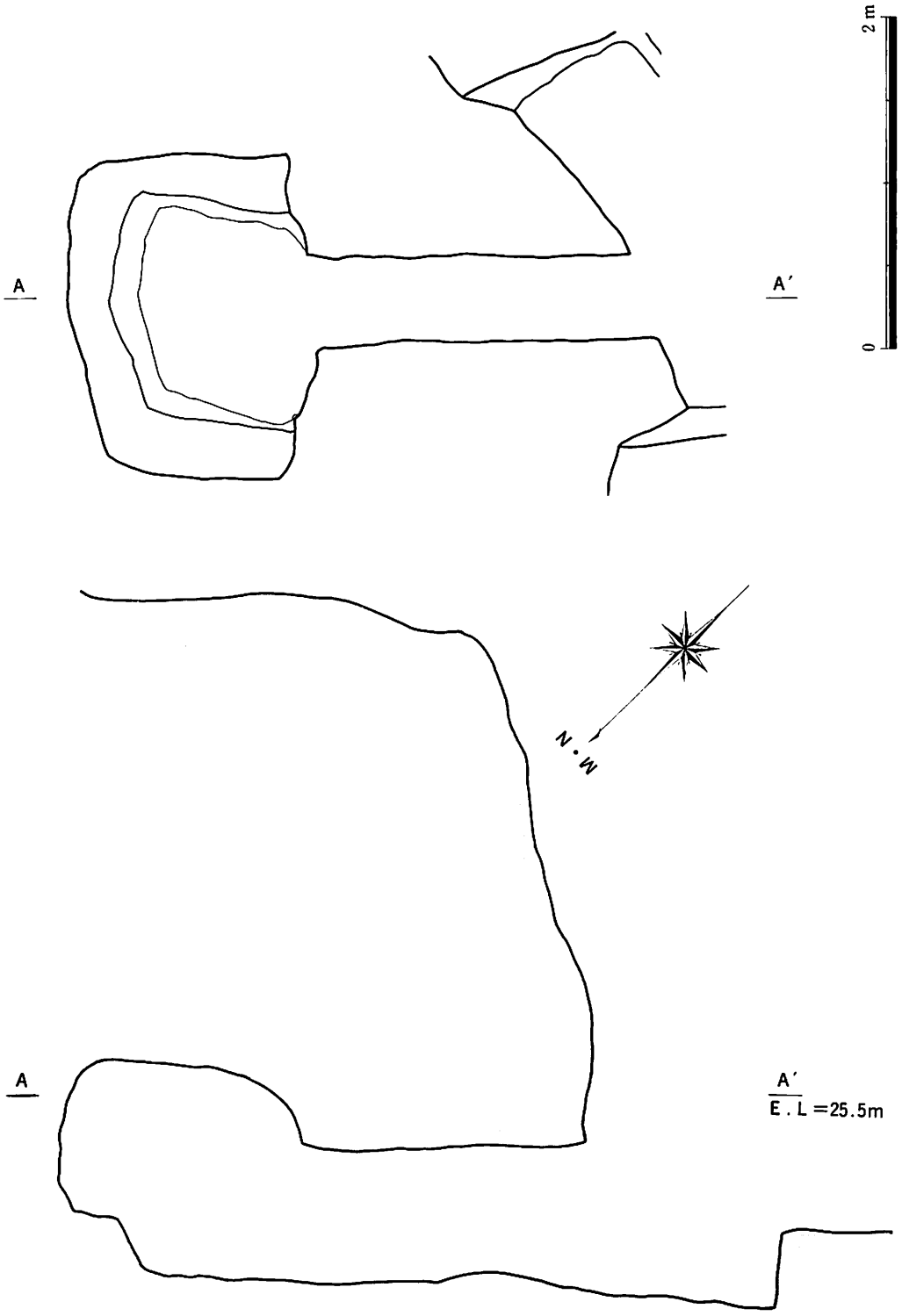
墓室の縦軸は約1.45m、横軸は約1.96mを測り、横長の長方形を呈する。墓室の奥・左・右には底面からの高さ約0.3mを測る壇を一段設ける。墓室内床の部分は、縦軸約1.0m、横軸約1.26mを測り、横長の長方形を呈する。

入口部は、奥行約2.0m、高さ約0.8m、幅約0.5mを測る。

蔵骨器(厨子甕)等の遺物は得られなかった。



第4图 1号墓实测图



第5图 2号墓室剖面图

C. 3号墓 (図版6)

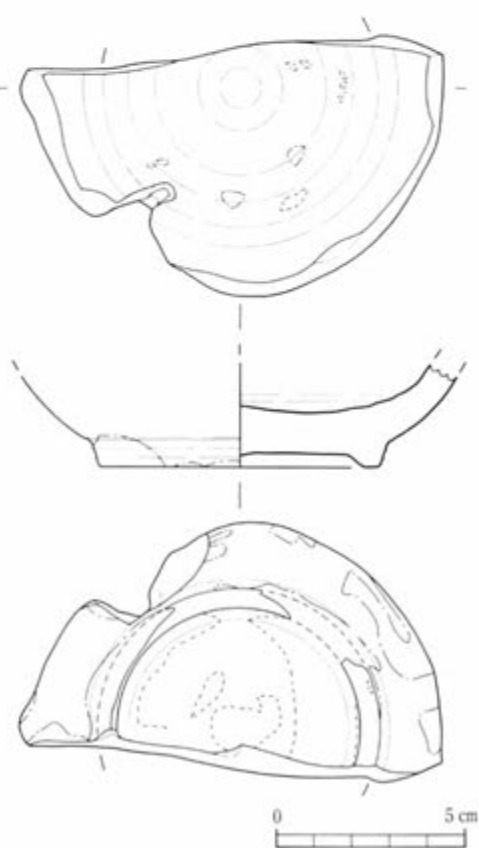
1・2号墓同様、標高約25.0mに位置し、主軸を北東に向ける。

墓室の縦軸は約1.2m、横軸は約1.94mを測り、横長の長方形を呈する。壇の造りは2号墓と類似する。

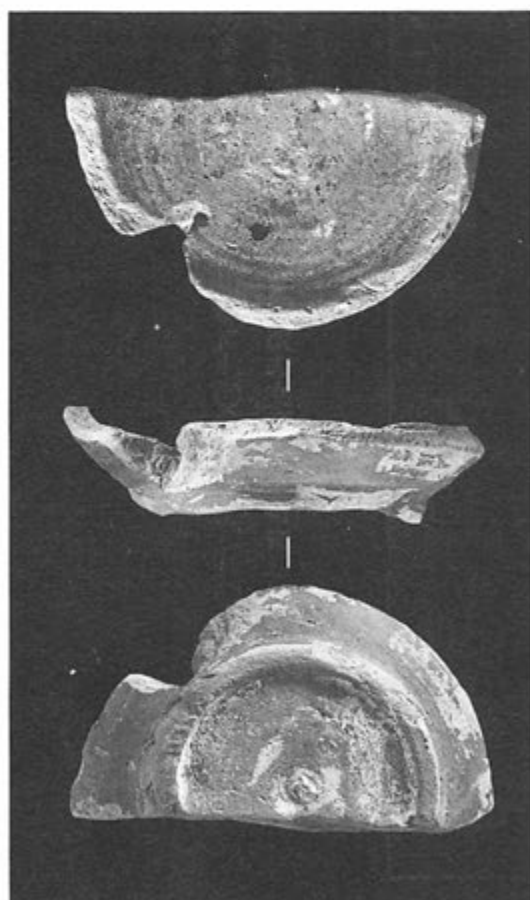
本墓は、後世の攪乱が著しく、天井部が崩落しており保存状態は極めて悪かった。

出土遺物としては、蔵骨器(陶製厨子甕)の破片が数点得られた。

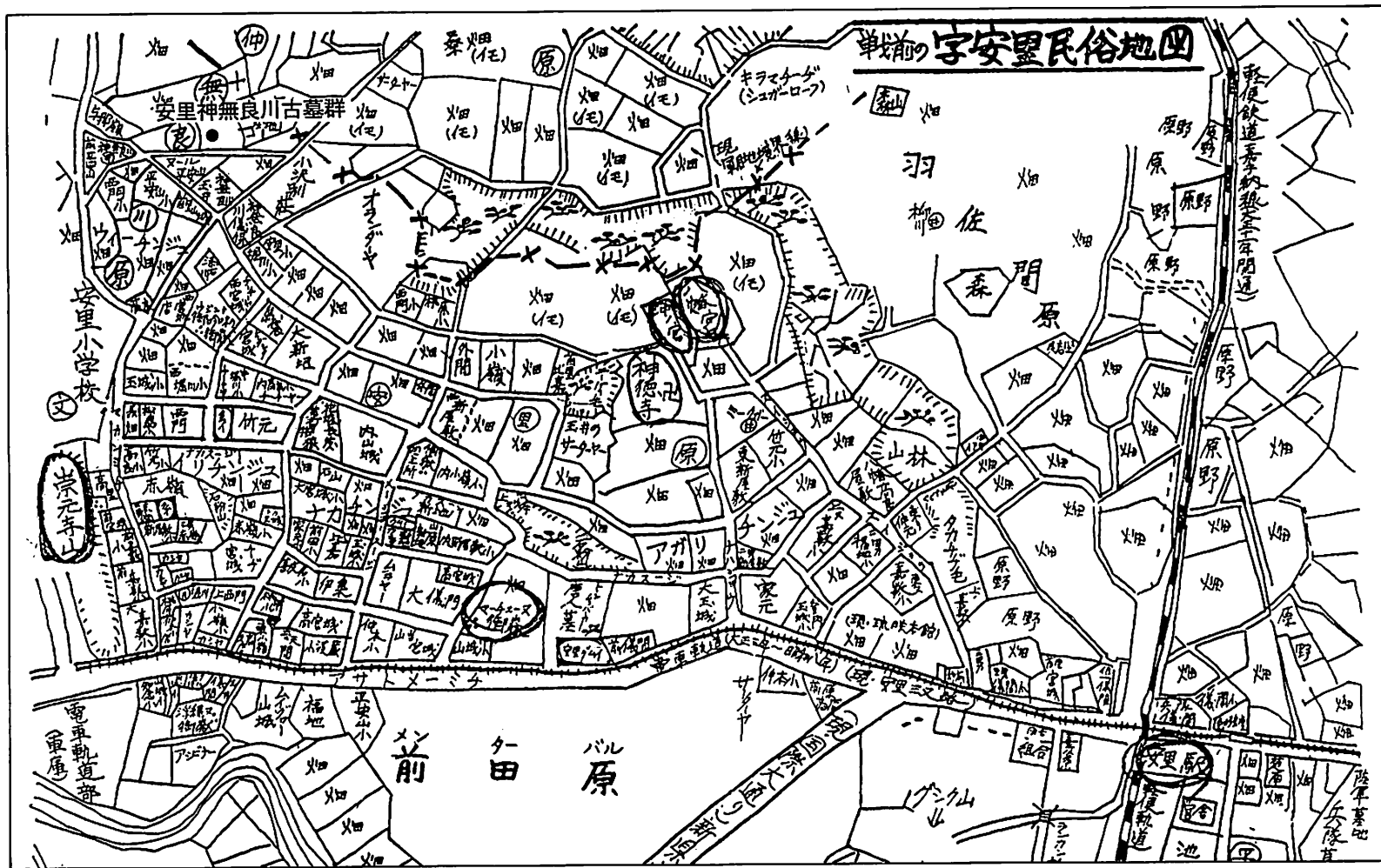
本古墓群から得られた蔵骨器(厨子甕)はマンガンを掛けた資料が主体であった(図版8)。先述したように、量的に僅かであることから墓を移転する際、そのほとんどが運び出されたものと考えられる。また、各墓とも墓室の壁や天井部には構築の際のノミ痕が顕著に残っていた。



第6図(図版1) 1号墓出土遺物



図版1(第6図) 1号墓出土遺物



第7図 戦前の字安里民俗地図

第4章 ^{カンラガーバル}神無良川原の古墓について

— 平成元年10月26日・11月7日表面踏査等による所見 —

神無良川原に立地する古墓は、俗にいうニービ層に穿って造られたフィンチャー(掘り込み)形式のものが主である。上下二つの(それぞれ約6基程)群れがあるが、上のものは外観形式的に見て、コンクリートをふんだんに使っていて、戦後のものが主と思われる。しかし、下の群れは墓口に粟石を利用した装飾も見られるが、単に長方形の墓口だけのものもあり、こちらの群れが上のものに先行すると考えられる。墓の内部は、一辺が1m50cm程であって小さい。棚やシルヒラシに該当する施設もなく、大変シンプルな墓である。

同様の形式の墓は字松川のサクマ原(現松川小学校)でも見られた。この墓から出てきた厨子甕には、そのほとんどに銘書がなく、一部にはあったものの「筑登之」などがあって、いずれも百姓階層のものであるようであった。年代的には、道光年間(1821~1850年)の銘書があるもののほか、18世紀を中心に流行するボージャー形式の厨子甕が見られ、当時から墓所としてそこが利用されていたことが分かった。

しかし、ニービ層に掘り込まれた同様の墓は、戦中戦後も仮墓などに見られるので、それだけでは即断できない。そこで、平成元年11月6日に安里1区自治会長儀間盛善氏と安里2区自治会長の山城豊子氏に電話で照会したところ、神無良川原の墓地は戦前からあり、安里の百姓階層のものであったとのことである。因に山城氏は神無良川について、16世紀に儀間真常がカンダバー(芋の葉)をつけて置いたところその名があるといい、安里の重要な拜所であると教えて下さった。

1977年沖繩タイムスに連載された「思い出のわが町」にある戦前の地図では、当該地は墓地として記されており、伝承と併せてそこが少なくとも戦前からの墓所であることは確認できよう。

市内では多くの墓所が破壊の危機に瀕している。由緒ある家の墓などは、建造物や史跡としての価値を認められて指定文化財とされて残ることもあるが、当該地に見られるような庶民の墓は殆ど顧みられることがない。従って、このような墓も記録をしなければ、本県における墓制史の一端が抜け落ちてしまうことになる。また、墓とその周辺から発見されると思われる厨子甕や副葬品等は、その時代背景や暮らしぶりを窺い知ることができる重要な民俗資料である。そのため、調査してそれらの収拾を図らなければならない。

第5章 まとめ

以上、発掘調査の成果を略記してきた。ここで、若干のまとめを行いたい。

本市教育委員会は、今回の調査に至る以前に、井泉・神無良川を含めた周辺地域の文化財について現地踏査を行っている。その時の状況および歴史的背景等について、第4章で古塚達朗によって紹介されている。

さて、今回の調査では、3基の古墳が対象となった。しかし、得られた資料のほとんどが破片で、墨書（銘書き、方言でミガチ）を有する蔵骨器（厨子甕）なども確認できなかった。その為、具体的な墓の構築年代や所有者・所有者集団（集落）を特定するには至らなかった。

本古墳群において注目される点は、2号墓で確認された入口部の形態である。第3章Bで述べたとおり、基盤の砂岩を約2.0mほどトンネル状に掘込み、その奥に墓室が構築されている。このような形態は、現在報告されている墓にはあまり見られない特徴と言える。

類似形態として、沖縄市呉屋に所在する下仲宗根門中の墓があげられる。報告によると、墓が掘込まれた基盤は砂岩で、入口部の奥行きは、約1.2mを測る。

このような形態を呈する要因は、掘り込みの基盤である砂岩が脆く、墓の崩落を防ぎたいとする意図が働いたものと考えられる。しかし、その形態が小禄砂岩地帯（方言でニービ）に立地する墓に顕著に見られる特徴であるのか、今後、類似遺跡の調査・報告を待って、より詳細な検討を行っていきたい。

出土遺物で興味深い資料として、1号墓前面の埋土から出土した陶器の底部がある。焼成は一見土器質である。素地に白土で化粧を施し、その土に青色の釉薬（瑠璃釉）を器面全体に施している。現在のところ、器形や産地・時期等については判然としない。今後の資料の増加を待ちたい。

ところで、県内における古墳についての発掘調査は近年増加する傾向にあるが、その多くは琉球石灰岩地帯に占地する掘り込み墓（方言でフィンチャー）や亀甲墓が対象であった。しかし、本古墳群は島尻層群に属する「小禄砂岩（方言でニービ）」に立地するものである。今回の調査によって両地帯における古墳の比較・検討が行える資料を提供できたものとする。

今後は、他の古墳群との比較検討、文献資料の活用、聞き取り調査など多角的な視点からの検討を行うことにより本古墳群を含め、古墳を取り巻く社会背景が明らかになるものと思われる。

参考文献

- 【沖縄市文化財調査報告書第6集 下仲宗根門中の墓】 沖縄市教育委員会 1985年
【シンポジウム南島の墓】 沖縄県地域史協議会編 1989年

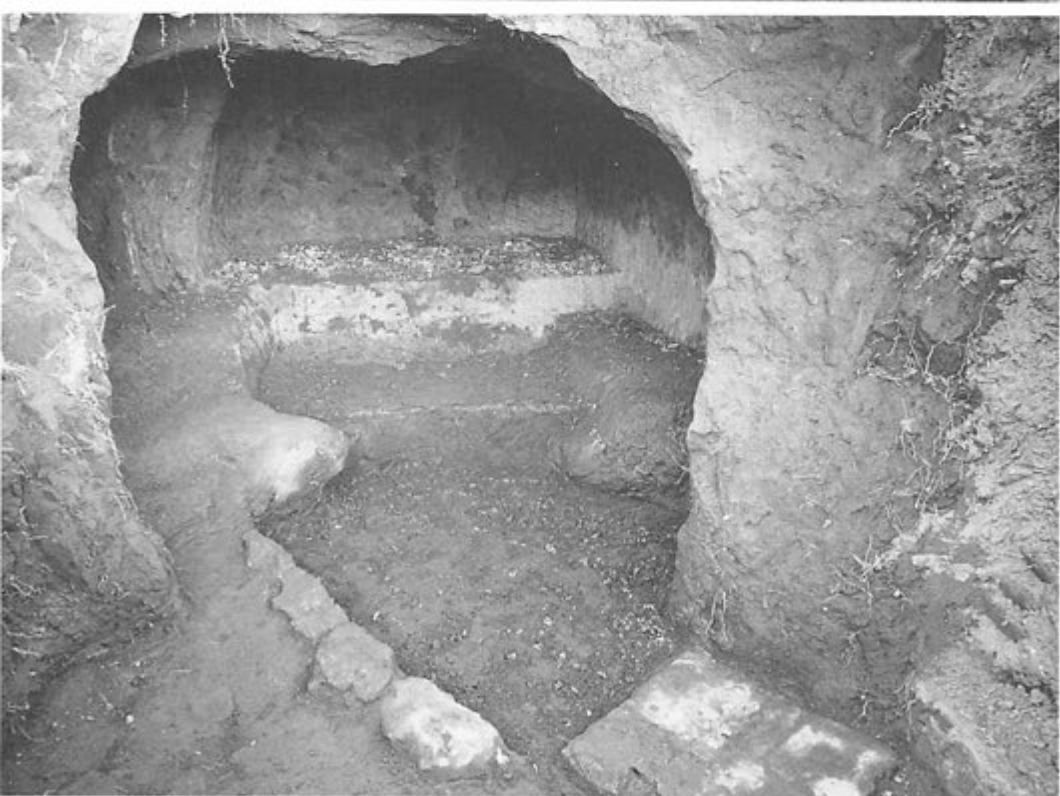
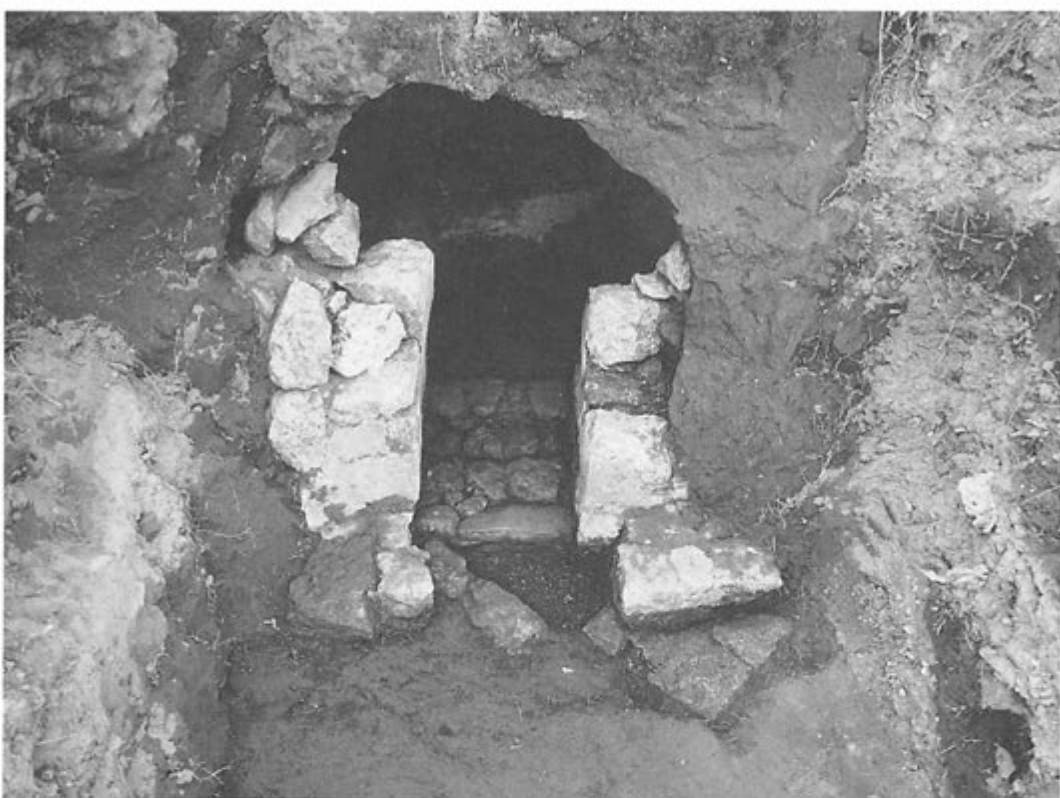
版 图



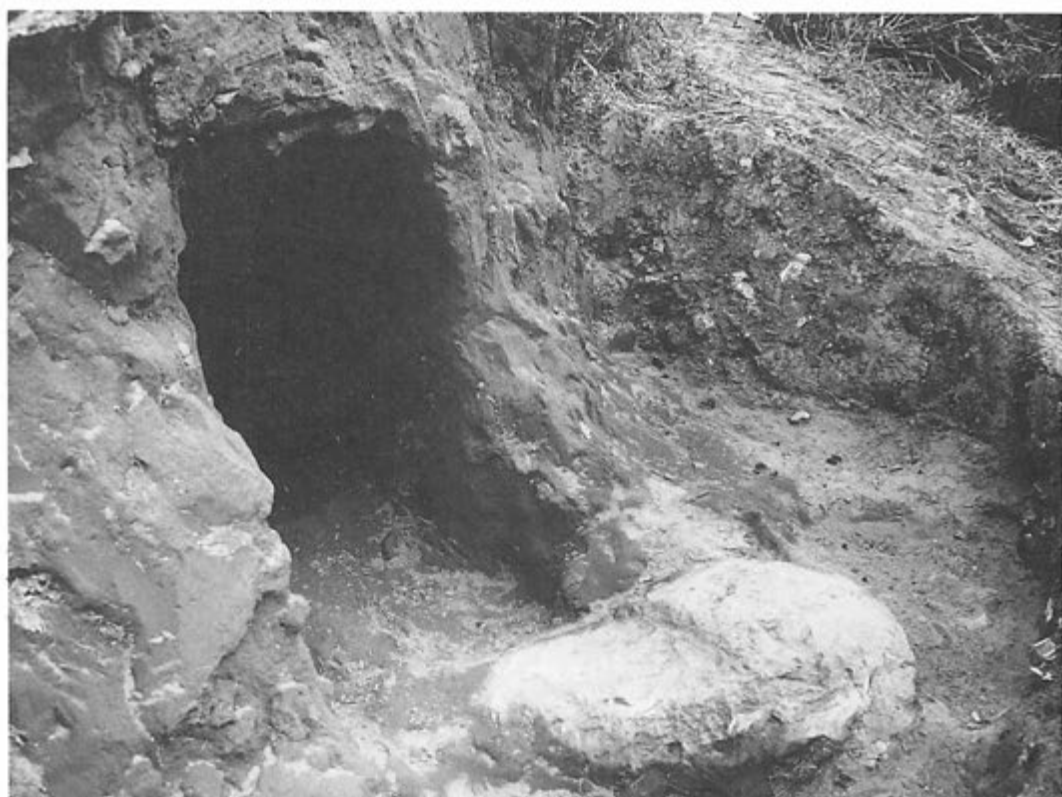
図版2 遺跡近景 上：北東から
下：東から



図版3 上：遺構配置状況（右から1号墓・2号墓・3号墓）
下：発掘調査作業状況



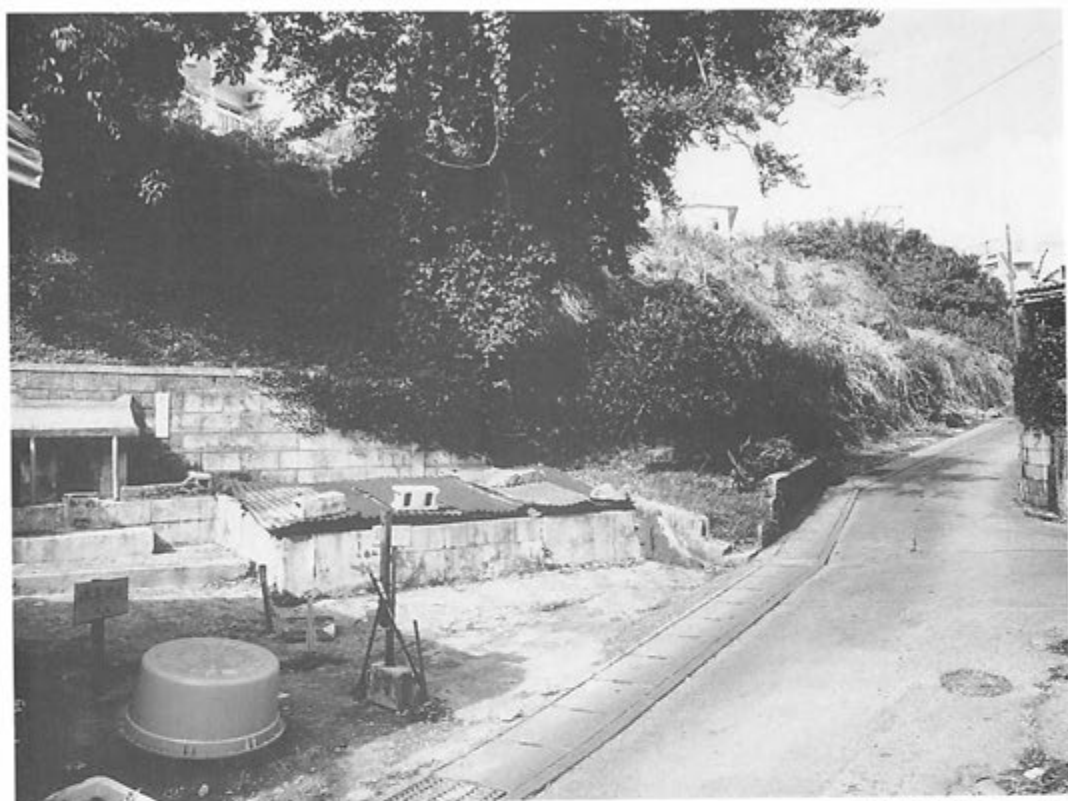
図版4 1号墓 上：正面の状況
下：下部墓（墓室内床）の状況



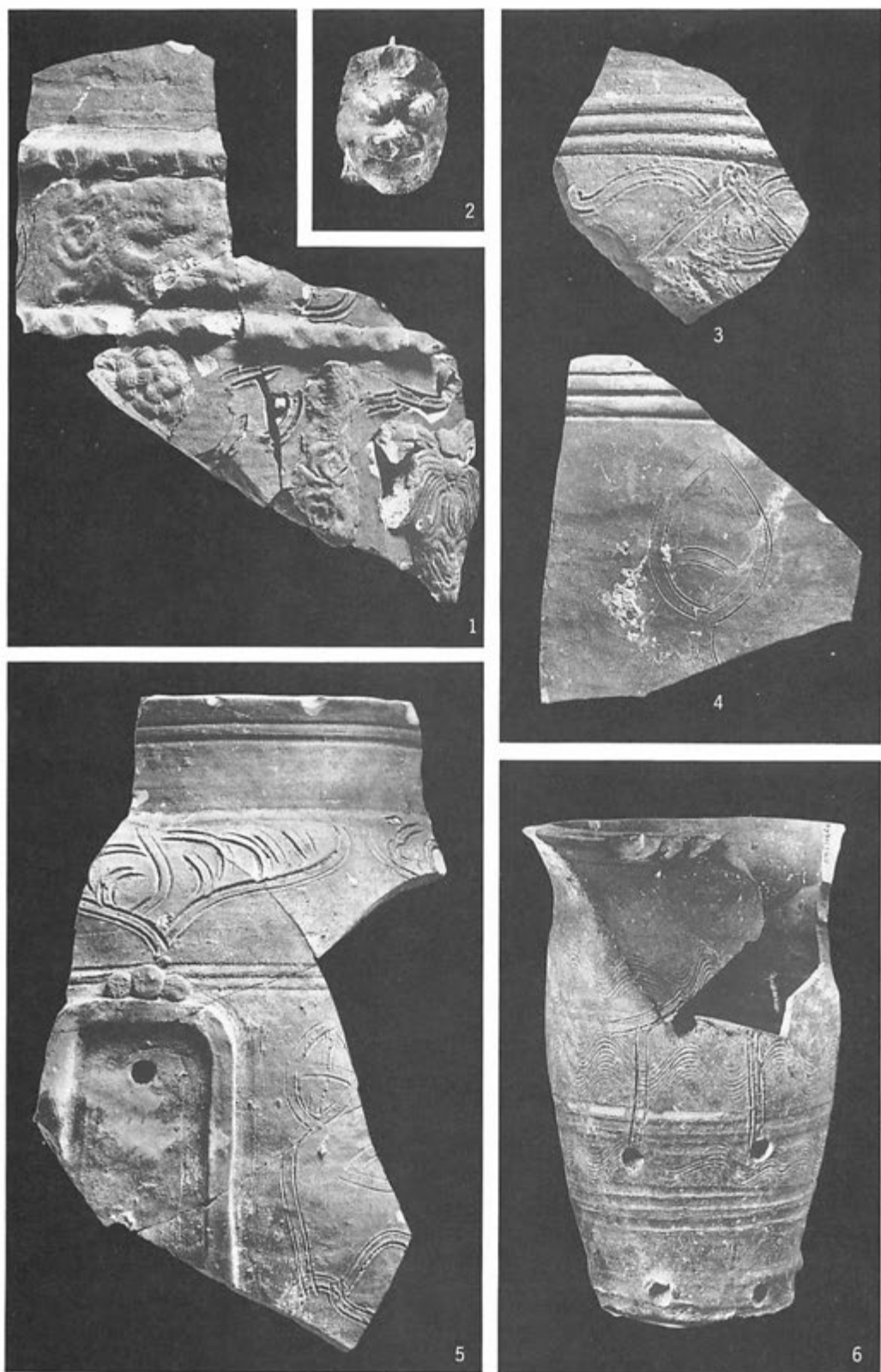
図版5 2号墓 上：入口部（正面）の状況
下：（左）入口部（内部）の状況 （右）墓室の状況



図版6 3号墓 上：正面の状況
下：墓室の状況



図版7 安里神無良川（井泉） 上：西から（右奥の斜面部が本遺跡）
下：南から



図版8 出土遺物 1号墓出土(1~4)・3号墓出土(5・6)

あ さと か ん ら が こ ぼ ぐん
安 里 神 無 良 川 古 墓 群

——マンション建設に伴う緊急発掘調査報告——

- 発 行 1995年 8 月
興 島産業不動産
〒901-22 沖縄県宜野湾市大山6-3-3
那覇市教育委員会
〒900 沖縄県那覇市樋川2-8-8
- 編 集 那覇市教育委員会文化課
☎ 098-853-5775
- 印 刷 文進印刷株式会社
〒901-03 沖縄県糸満市西崎町5-10-14
☎ 098-994-5777
-